

茶の湯 文化学会 会報

第111号 / 2021年12月23日
発行 茶の湯文化学会
京都市左京区下鴨森本町15
生産開発科学研究所内
〒606-0805
TEL 075-702-9270
FAX 075-702-9314
E-mail:chanoyu@oregano.ocn.ne.jp
https://www.chanoyu-bunka-gakkai.jp/

令和三年度大会報告

矢野 環

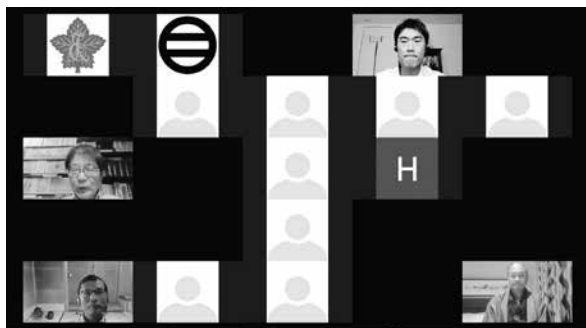
今年度の大会は、令和三年九月二十五日（土）十時五十分から行われた。このコロナ禍の中にあり、Zoom配信となった。この準備段階では特に東京例会関連の皆様に変なご面倒をお掛けしたが、その御蔭で無事開催でき、成功裏に終らせることができた。会員の皆様にも多くの方の参加をいただき、確認した同時接続人数は114名に達した。また、司会は、石塚修理事、山田哲也副会長、竹内順一理事、田中秀隆理事に担当いただいた。

大会の運営方法については、理事会や東京の担当の方々での会議（注）、そして当日の実行部隊（岡本（浩）、福島、依田、石塚、下村、田中各位）により綿密に計画いただいた。途中で若干行き違いも生じたが、概ねあるべき方向で落着いたと思える。実は、ミニハイブリッドな実行方法も考えて頂いたのであった。

頭部を起点に――
3 西本弘之（米子工業高等専門学校）「利休茶道具の美しさの規則性について――園城寺の花入と泪の茶杓の画像計測による特徴点抽

様々な意欲的な研究発表を頂き、また岡倉天心のシンポジウムも活発な議論となった。ここで、簡単に経過を振り返って置くことが、今後の為に必要であろうと考える。

午前中には、次の通り四つの研究発表をいただいた。
1 増山真一郎（豊橋市美術博物館学芸員）、堀場美佐（美術工学校士）「天正十年の千利休―新出古田織部宛書状から―
2 櫻本香織（早稲田大学大学院博士後期課程）「利休回帰」と「宗統復古」――「南方録」「滅後」冒



会長挨拶

出に關する考察―」

4 三宅秀和（群馬県立女子大准教授）「維新前後の大名家道具の流出と保存について―熊本藩細川家の場合を中心に―」

1 増山・堀場発表は、新出「古田佐介宛 利休書状 十月十六日」の文中の「秀さま」≡秀吉？を鍵として、発行を天正十年十月（利休六十一歳）と比定し、「我等座敷」

≡利休茶室、「ちり紙」等の内容検討を行った。つまり本能寺の変後の秀吉と利休の關係を示す意義があるとされる。史料の公刊が進んでおり、利休の手紙も様々な集積があり、さらに画像比較も容易になった上での研究であり、学恩に謝するものと言える。質疑においては「秀さま」に秀吉以外の可能性を指摘したものの、「ちり紙」に關して『日葡辞書』も話題となった（茶の湯研究で時に利用はされるが、活用されているとは言いがたい）。この種の言葉の解釈では必

要に應じて『羅ボ日辞書』も見べきだが、うまく記載がないことも多い。香の關係で、有効な利用ができたこともあったが。茶室といえは、中村利則前会長がお亡くなりになったので、『山上宗二記』の茶室図の描画法、また待庵とされた図は確かにそうかといった事項がそのまま残されてしまっている。

2 櫻本発表は、実山編『南方録』の典拠を探る一連の研究の一つである。卍山道白や梅峰竺信は「宗統復古運動」を展開した。特に元禄十三年（一七〇〇）に卍山が幕府に訴えた文書が中心となる。卍山は立花実山に招かれる。『南方録』については、幸いにも二〇二一年十月に、筒井紘一氏の編集による、本文2色刷（黒、赤、紫墨）で意欲的な解題の、茶書古典集成十一巻『南方録と立花実山茶書』が発刊された。実山のみならず、寧拙による書、参考史料として『梵

字艸』まで収めた画期的なものである。『淡交』十一月号の特別記事と合わせてご覧頂きたい。実山と寧拙が実際に『南方録』を著述した年代は、利休百回忌よりも遅くても一向に差し支えない。神津朝夫氏も、今年四月の『茶の湯の歴史』文庫本にて、時期が遅い可能性を示唆しており、かつ、土屋宗俊に対抗するために利休を利用したという観点も説明されている。従って、卍山と実山が出会った時期が一見遅くても不自然ではない。また質疑において、二写本において文章の一致、離れていても数語の一致の場合は関連が推定されるが、ばらばらの語句の場合は一概に言い難いという意見があった。

3 西本発表は、茶道具の見方に理工学的な観点も提唱するものであった。ただし、一般論として形態の類似性は「特徴点」の方式では必ずしも良く反映しない。その

ため、輪郭全体を考察する、楕円Fourier級数を用いた手法が生物学でも適用されている。そして茶道具の場合も、既に茶杓については、耕三寺華蓮による発表が近畿例会で行われた。茶杓は、確かに（下削りは他人としても）かなり個人の特徴がでることが、全体的なフォルムの把握で解っている（例外的に纏まらない家元も存在するが）。それを逆に言うと、特徴点は取り方の任意性がかなりあり、「形の把握」には遠い、という例でもある。理系学会発表としては「耕三寺華蓮、金明哲（二〇二〇）。茶杓造形の計量分析―数内家の茶杓系統について。第四十八回日本行動計量学会抄録集、一五六―一五七、九月一日―四日」（耕三寺は前期課程は私の院生で、退職後は金教授の博士後期課程所屬）

4 三宅氏は永青文庫美術館（竹内順一元館長、小松大秀館長）に

おられたので、細川家関連研究は堅実である。歴史のある細川家の道具はだれしも興味ある。とかく頼政茶壺などを考えがちだが、明治に苦勞して保たれたことがよくわかる発表であった。私は、文書の方の永青文庫（熊本大学）で、十分に感心していたのであった。細川家レベルの他の記録は岡山池田家であるとのこと。将軍家のもので、家光収集道具の一級品は、明暦大火で罹災し、焼物でも江戸城のある蔵に保存されていたが、鶴の一声のように、内々に清水徳川家に進上されたり、投頭巾肩衝のように開城のときに持ち出されたはずだが行方不明となった。それらの事情も今回の茶書古典集成一六『名物記集成』で誰にでも理解できるようにする予定である。将軍家茶道具のリストというとかつては時期の明確でないものが適当に紹介されていたが、竹内・田中・矢野の青山会調査（と直前の小浜酒井）によって、正保三年

の御物と諸方の状況が明確となり、大名家でも『古今名物類聚』を含む刊本類でも、実は「正保三年名物記」が利用されており、『玩貨名物記』は『大正名器鑑』まで一切利用されていなかった。りしたのであった。

○シンポジウム「岡倉天心と明治の茶の湯」については、田中秀隆理事（大日本茶道学会・三徳庵）による報告が別途行われるので、ここでは民間のことについてのみ触れる。岡倉天心、外国人、近代数寄者、家元という観点から、田中氏の基調講演の後、中村修也会長（文京大学）、齋藤康彦山梨大学名誉教授、依田徹理事（遠山記念館）による講演があった。明治廿九年には大師会、三十一年に日本美術院設立といった説明があった。当時の民間の出版にも見るべきものがあつた。『茶の湯と生花博文館日用百科全書第二編』明治廿八年六月、冒頭に松浦心月の言

葉がある。書き出しが「茶道ハ心のわざにして 手の技にあらず」と。江戸時代の刊本『茶式湖月抄』利用が明白であり、従つて『南方録』の記事が色々入っている。また、利休百会記刊本系の全体の翻刻がある。今ひとつは、『主客案内 茶の湯独稽古 日本諸芸全書 第四篇』（明治廿九年八月序文、明治三十三年八月発行、武田交盛館）であり、これも『南方録』の

影響がある。これらに民衆のエネルギーが感じられる。今後の茶道研究の発展を願つて、今回の大会報告を終了したい。（注）六月八日の会議出席者は次の通り。竹内順一、岡本浩一、石塚修、田中秀隆、谷村玲子、美濃部仁、依田徹各理事、福島修、下村奈穂子両幹事、矢野環、山田哲也両副会長、宮崎真紀子事務局

	基調講演 近代茶道と岡倉天心の位相 『近代茶道史』から『近代茶の湯史』に向けて 2023年8月8日 茶の湯文化センター 依田徹
	外国人の見た茶の湯 山梨大学名誉教授 齋藤康彦
	数寄者と茶の湯 山梨大学名誉教授 齋藤康彦
	明治東京の家元と茶道 遠山記念館 依田徹

シンポジウム

令和三年度総会

令和三年六月六日(日)に開催を予定されておりました本年度総会は、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため中止となりました。そのため郵便により議案が諮られました。その結果、〈第一号議案〉令和二年度事業報告、〈第二号議案〉令和二年度決算(案)、〈第三号議案〉令和三年度事業計画(案)、〈第四号議案〉令和三年度予算(案)、〈第五号議案〉役員選出(案)の件につきまして、会員総数六五〇名のうち二五五名より回答があり、いずれもコロナ禍、例外的承認の意思が示されました。

ご報告

中村修也氏(当時会長)から、令和三年の大会終了後に、九月二十五日付の矢野・山田両副会長と

事務局宛メールにて、茶の湯文化学会を退会する、との申し出がありました。

慰留に努めましたが、ご意志が堅かったので、十二月十二日(日)に理事会を開催し、退会を確認し、新会長を選出する選考委員会のメンバーを決定いたしました。来る令和四年の総会にて新会長が選出されるまでは、両副会長が会務を代行いたします。

例会のご案内

※例会の日程・会場等、変更する場合がありますので、ホームページまたは事務局までお問い合わせください。

東京例会

令和四年年三月十三日(日)
午後二時(Zoom開催)
「近代数寄者の表装」『大正茶道

記」にみる「佐竹本三十六歌仙絵」の表装」
濱村蘭衣子

「渡辺又日庵とその一族の茶の湯」
水野莊平

北陸例会

令和四年三月十二日(土)
「未定」

高知例会

令和四年二月六日(日)
午前十時〜正午

会場・高知県立文学館 慶雲庵茶室
高知支部二〇二二年度事業計画

第四代熊倉会長

「京都文化功労者」表彰

第四代茶の湯文化学会会長熊倉功夫先生が、京都文化功労者(学術(日本文化))として表彰され

ました。

京都市では、毎年、永年にわたる市の文化の向上に多大な御功労のあった方々を「京都市文化功労者」として表彰しています。今年度は令和三年十一月二十二日(月)京都市役所 正庁の間において、表彰式が行われました。

新刊案内

『茶の湯の茶碗』全五巻
第五巻『樂茶碗』淡交社 定価六、九三〇円

『宗匠の遠州 茶道に二大流派を築いた先導者』
矢部良明著 宮帯出版社
定価二、九七〇円

『現代語訳 不白筆記』
谷 晃著 河原書店
定価三、六三〇円

『茶書古典集成 十一 南方録と立花実山茶書』
筒井絃一編 淡交社
定価一一、〇〇〇円

質問コーナー

質問

「茶事」と「茶会」を区別するようになったのは、いつ頃からでしょうか？

本来「茶会」とは「茶事」のことだったと思うのですが、今は区別しています。それは「大寄せの茶会」と「正式な茶事」を区別する必要が生じたからだと考え、「大寄せの茶会」が多く行われるようになった時代以降のことではないかと思えます。

そうすると、「大寄せの茶会」が多くなった時代とは、いつ頃なのでしょう？ 第

二次世界大戦後でしょうか、茶道を学ぶ女性が増えた明治時代でしょうか、或いは、それ以外の時期でしょうか。ご教授いただけましたら有難く存じます。

(高橋尚美 (学生会員))

解説

「茶会」と「茶事」の語は茶の湯成立以前からあり、両語とも今とは異なる集いを意味して、それぞれに変化して行きました。

そこで茶の湯の茶書で両語の使用状況を追うと、「茶事」の語の使用は漢文体で茶の事を意味したものを数えても、『烏鼠集四卷書』(一五七二頃)、『長闇堂記』(一六四〇)、『藻志穂草』(一六六〇)、『四祖伝書 三斎公伝書』(一六四八〜五二)、『古田織部正殿

開書』(一六六六)、『茶話指月集』(一七〇一)、『源流茶話』(一七四五)などに数回使われる程度です。

そうしたなか『白筆記』(一七五七)と、同時代の『茶話抄』で「茶事」の文言が急増します。当時、茶道人口が増加して『茶話抄』の編集にも関わった川上不明白らにより、「茶事」の語が江戸から諸藩へも浸透した時期といえそうです。

ただ、その後「茶事」の語の使用頻度が多少上がったとはいえ、その意味合いは茶の湯の会や、茶の湯そのものを指すなど、幕末まで現在より多様な用法のようです。

さて、幕末から明治初期には、煎茶の大茶会が流行していました。そして明治十五年、田能村直人の初会(初釜)七席の中に、抹茶の薄茶席が一席設けられます。以後の抹茶

の大寄せ茶会は、利休三百年茶会(明治二二・二三)を皮切りに、大師会(二八)、小堀宗甫二百五十年忌追善茶会(二九)、豊太閣三百年祭(三一)、表千家七代如心斎百五十年忌茶会(三三)、北野神社献茶式(三五)と続きます。その後も明治三十年代は、毎年様々な年忌茶会が催され、大寄せ茶会は盛況を呈しました。

すると、茶会の中でも中立を有する会や、そうした形式に「茶事」の語を用いる傾向が強くなるのは近代以降とみられます。その状況を知る手掛かりに『茶道月報』(大正十一年創刊)の会記欄を繰ると、毎号、見出が付された各流派の会記が、約十〜三十数件掲載されています。その内、二、三件の茶事の会記の見出しには、必ず「茶事」の語があり、大半の大寄せ茶会の見

出しと、使い分けがされています。こうした状況が、大正期から昭和八年頃まで毎月続きます。(昭和九年には掲載地域が広がり、茶事の会記は殆どありません)

つまり明治期に大寄せ茶会が盛んになり、大正期の新聞数紙に茶会記事が掲載され、他方、茶道専門誌の発行当初から、こうした茶会記掲載が昭和初期まで続き、昭和初期には流儀機関誌が相次いで創刊されました。ただし、新聞をはじめこれら全てに、両語の規則的な「区別」はみられません。

よって一つの考え方として、茶の湯ジャーナリズムが始動した大正期から昭和初期を「茶事」の語の、狭義的な語用の浸透期、と捉えることができるのではないでしょうか。それなら、昭和前半頃までの書籍にみる「茶事」の語

用に、含みの表現がままあることも理解できます。

(中村幸)

お知らせ

令和四年度総会・大会のご案内

令和四年度総会・大会を左記の日程で計画中です。詳細はホームページ及び令和四年四月に郵送にてご案内いたします。

日程：令和四年六月四日(土)・

五日(日)

テーマ：「わび茶の生成 珠光か

ら利休へ」

令和四年度大会発表者募集

令和四年度の研究発表者を募集します。発表を希望される方は、大会研究発表用概要書式を添えて、学会事務局までメールもしくは郵送でご応募下さい。大会終了

後、発表内容をベースとして論文にまとめ、学会誌「茶の湯文化学」に投稿していただけるような発表をお待ちしております。

開催日程：令和四年六月四日(土) 応募資格：茶の湯文化学会会員であること

募集締切：令和四年二月十日(木) 発表時間：研究発表二十分 質疑応答十分

・メールでの応募の場合は、件名を「令和四年度大会発表募集」として下さい。

・応募の際は連絡先のほか、現在の所属先、肩書等もあれば、併せてお知らせ下さい。

・応募多数の場合は、審査の上決定的いたします。

・詳しくはホームページをご覧ください。

・その他ご質問等ございましたら、学会事務局までお問い合わせ下さい。

※事務局の年末年始の休業は、令和三年十二月二十八日(火)～令和四年一月五日(水)となります。

※年会費未納の方は、至急払込みくださいますよう、よろしくお願いたします。

